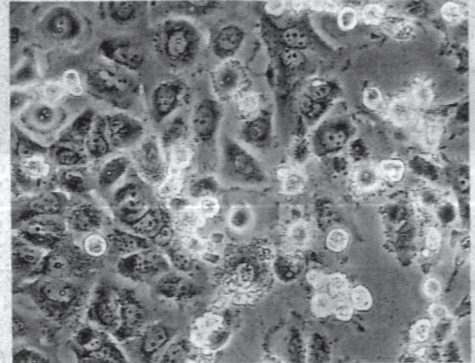
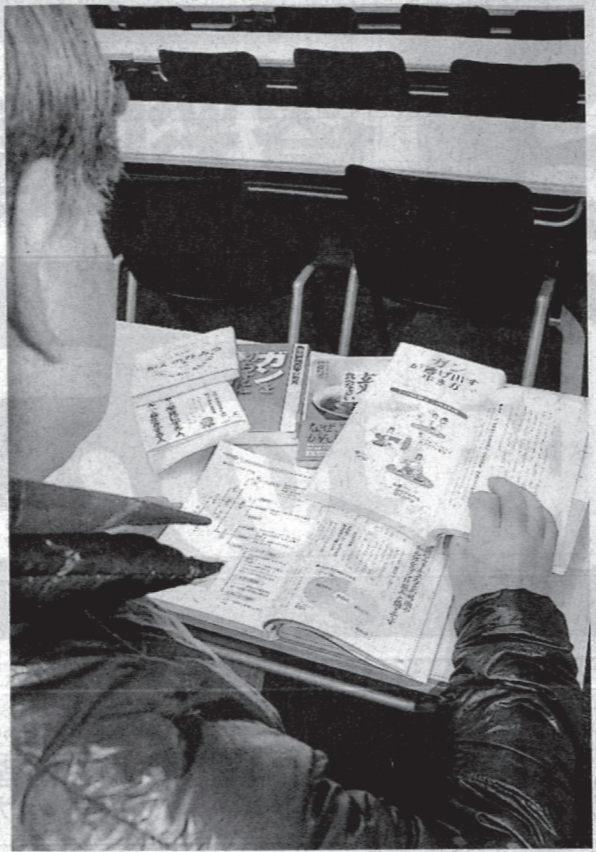


がん患者力



作用の異なる抗がん剤の併用で、死んでいく肺がん細胞のようす＝映画「がん細胞」(桜映画社)から



購入したがん治療関連の書籍を見ながら、治療法で混乱した当時を振り返る浪瀬耕造さん

ネット・書籍…あふれる情報どう選べば まず学ぼう「標準治療」

自分や家族ががんと診断された場合、どのように治療法を選べばいいのか。あふれる情報のなか、その羅針盤となるのが「標準治療」。多くの専門医が最善と考える治療法だ。標準治療について学ぶことは、がんと闘う「患者力」をつける上で、大きな武器となる。

神奈川県内に住む浪瀬耕造さん(68)の妻は2011年4月、別の病気の検査がきっかけとなり、卵巣にこぶし大の腫瘍が見つかった。卵巣がんと告知された。「2種類の抗がん剤で腫瘍を小さくして、手術で切除しよう。標準治療です」と説明を受けた。

手術せず治るなら「手術しなくてもがんは治る」「がんは食事で治る」。健康なときからそんな本を熱心に読んでいた妻は、「手術や抗がん剤以外で治したい」と望んだ。夫婦で別の治療法を探した。免疫療法など代替療法の本を10冊以上読んだ。インターネットで検索もしたが、情報が多すぎて何が正しいかわからなくなった。

一方、セカンドオピニオンを受けた病院で同じ治療を勧められた。漢方医からは「漢方だけでは治らない」と言われた。病院に配

効果、臨床試験で科学的に証明

属されたがん経験のある相談員からも「ほかの治療は、まだそこまで根拠がありません」と助言を受けた。ほかの治療との違いを明確には理解できなかったが、1カ月後、標準治療の抗がん剤と手術を受けることに決めた。

腫瘍も少し小さくなり、11年10月に手術を受けた。だが、組織の検査で悪性度の高いがんだと分かり、余命半年と言われた。12年5月に亡くなった。

浪瀬さんは治療の情報に混乱した当時をこう振り返る。「患者はわらをもつかむ思い。本に『手術しなくても治る』と書かれていれば信じたいし、健康保険が使えない高額な新しい医療こそが最良だと思った」。妻が亡くなった後、がん治療の正しい情報提供などに取り組むNPOキャンサーネットジャパン(CNJ)の講座に通って学んだ。そこで初めて知ったのは、臨床試験を経て効果が科学的に証明されているのは、標準治療だけということだった。妻の治療の選択は間違っていなかったと思う。

CNJが運営するサイト「キャンサーチャンネル」(<http://www.cancerchannel.jp/>)は、がんの部位別に、専門の医師らが治療の情報を解説する番組を複数提供している。

「宣伝目的には注意」。インターネットの情報にも根拠がはっきりしないものが多数ある。CNJ理事も務める東京大病院の後藤博助(呼吸器内科)は09年、インターネットで「ス

「指針」最適な参考書

製薬大手ファイザーが2012年にがん患者1千人を対象に実施したインターネットによるアンケートでは、治療法を決める際の情報収集で、最も多いのは「インターネット」、次いで「担当医」だった。図は玉石混交。また主治医1

人の意見では、バイアスが全くないとは言いが切れない。日本医科大武蔵小杉病院の勝俣範之教授(腫瘍内科)は指摘する。「最適な治療法を選ぶには標準治療について学ぶことが必要不可欠だ」。最新の12年版はサイト(<http://jbcstf.guideline.jp/>)に公表され、購入もできる(2415円)。年間約6万人が乳がんを診断される中、この1年半で約1万5千部も売れた隠れたベストセラーだ。このガイドラインは、治

情報収集先	割合
インターネット	46.8%
担当医	45.7%
家族・親類	24.6%
特に集めていない	19.6%
マスメディア	13.9%

知っていたが受けなかった	知っており受けた	知らなかった
73.2%	15.2%	11.6%

患者1000人を対象に製薬会社ファイザーがインターネットでアンケート

日本対がん協会が「がん患者とその家族や支援者が24時間歩いてがん征圧の寄付を募るチャリティイベント「リレー・フォー・ライフ」」。昨年は31都道府県にわたり42会場で開催しました。参加者は7万5千人、寄付総額は1億2千万円を超えました。これらは優れたがん研究への助成、検診を勧める啓

発活動、がん専門医をめざす若手医師への奨学金、患者への無料相談などに充ててまいります。最近若くは人たちの参加も目立っています。高校で初の開催となった大阪・大手前では、小児がんの一種、ユーズン肉腫で亡くなった久保田鈴之介さんの遺志を継いだ引き継いでくれました。久保田さんは中学2年で発症し5年の闘病の後、昨

年1月に18歳で生涯を閉じました。その前年、大阪・貝塚のリレーに参加し、がん患者らが励まし合う姿に感銘を受け、今度は母校で開きたいと準備を進めていたところ。シンボルカラーの紫にライトアップされた大阪城が3千人の参加者を静かに見守りました。今年もこうしたがん征圧イベントを全国で展開します。ぜひご参加ください。(協会事務局長・塩見知司)

血液でわかる発症リスク

山口大卒。山口大講師を経て11年か現場。山口大准教授 末広 寛さん(45)

未来を創る

わずか2ccの血液を調べれば、将来、がんを発症しやすいかどうか分かる。従来の手法とは異なるアプローチによって、がんのリスクを調べ、早期診断に生かす研究が続いている。

ヒトの遺伝子は、父親と母親のそれぞれから受け継ぐため、通常は2個(2コピー)ある。しかし、1個しかなかったり、3個以上あったりする場合がある。これを「コピー数多型(CNV)」と呼ぶ。

10年ほど前、乳がん患者に共通する多型を見つけた。当初は「解析を間違えたんだろう」と思った。しかし、あきらめずに研究を続けるうちに、海外の論文にCNVという概念が登場し始めた。「間違いはなかったんだ」。これから一気に研究が進んだ。

現在開発中の検査法は、15番染色体の2カ所の多型を調べる。もし陽性と出た場合は、約20%という高い確率で将来、乳がんを発症する可能性があるという。

2年以内に1万円以下で検査を提供することを目標とする。「リスクの高い人は、検診の間隔を短くする、生活習慣を見直すなどの対策が取れます」。

大腸がんや子宮体がん、膵臓がん、腎臓がんなどでも同じ研究を進めている。将来は一度に複数のがんの発症リスクを見つけていくことができる予想する。

駆け出しの産婦人科医だったころ、担当した患者が子宮体がんのため亡くなった。「もっと早くがんを見つければ、助けられたかもしれない」。その思いが、現在の研究生活につながっている。

「早期発見できれば治る確率も上がる。この検査を、検診を受けるきっかけにして欲しい」(岡崎明子)



山口大准教授

末広 寛さん(45)